

古代からのメッセージ

ペトログラフィ



土 岐 市

遙かなる古代に想いを馳せて

楯 滋 夫

私たちの身边には、現代の常識ではなんとも説明のつかない事(物)や、不思議なことがたくさんある。

私はひよんなことから、石に彫られた訳のわからない不思議な絵の線刻に出合った。

それは長さ2メートル、幅1メートルの岩に約2センチ幅の線で3頭のイルカと思われる動物が彫られていた。

子どもの落書きか、それとも真面目な絵なのか？何時頃、誰が、何の為にこんな絵を彫ったのだろうか。

ひょっとすると古代の人が彫ったのではないだろうか。

考えれば考えるほど疑問は深まるばかりである。

私はこの奇妙な絵に大きな衝撃を受け、何とかその真実を知りたいと考えた。

「土岐」の名が初めて歴史に登場するのは、天武紀五年「礪杵国」の記事であるが、この地域からは石器類(石鏃・石棒・石皿・石斧など)や土器類(縄文土器)が多く出土しており、かなり古くから人類が生活していたことが推測される。

日本には、大和朝廷が確立するずっと以前から先住民族の造った「くに」がいくつもあったといわれている。その中に韓国(新羅国)鬪鷄野から海を渡り、移り住んで来た一族があったという。この一族は、太陽神を信仰し、航海術に優れた海洋族〔海部族・安曇族〕であった。

この部族が東へ移動して「都支」「礪杵」「刀支」と表記を替え、この地に留まって大国を築いたという説がある。

またこの土岐地域は、昔から壺石や鬼板を産出し、沢地や岩が赤錆で染まっているのを見かけるが、その主成分は酸化鉄である。

この辺りには鉄分を多量に含んだ地層があることがわかる。

この鉄やマンガンなどの鉱物資源を求めてこの地に住み着いた人達がいたとしても不思議ではない。

また、その昔この地域は「東海湖」といわれる大きな淡水湖だった時期があった。海伝いにこの地へ到来した人達が、遠浅で日当たりがよく、小高い丘から小川が流れ出していて、海の幸・山の幸が豊富に手に入るこの地域に住み着いて、一つの大国を築いたという推測も十分成り立つ。

今までこの地方で見つかった、「人型マーク」「太陽マーク」「魚マーク」「水神マーク」「蛇マーク」などを象形的に表した線刻や、全天の明るい星(一等星)を、北極星を中心に彫った穴(盃状穴)はその存在を裏付けているようにも思われる。

足を大きく広げ、両手を高く上げて戦いのポーズをとっているように見える「人型マーク」、信仰の対象と考えられる「太陽マーク」、海洋民族である証の「魚マーク」・「水神マーク」、海洋で方位を知る上で絶対の存在であり鍛冶信仰の主神である北辰(北極星)を中心とした星座地図と思われる円錐形の穴などはなにを表しているのか。

さらに海の無いこの地に何故「いるか」や「ます」や「さけ」と思われる海に住む魚の線刻があるのか？

盃状穴の配置が北極星を中心とした一等星の位置に適合するのは何故か？などその謎はどんどん深まっていく。

この謎を解く鍵はないのか。いろいろと探してみるが、不思議な事にこの時代の事については歴史のなかにも地域の伝承や生活のなかにも、なんの痕跡も残していない。まったくの空白の時代である。

それは何故なのか。

今、私は石に刻まれた古代人のメッセージを手掛かりにしてなんとかこの謎を解き、その時代の真実の姿を現在の世に甦らせることができれば素晴らしいと考えている。



◎ ペトロ・グラフとは？

英語 Petro (岩石) と Graph (文字／文様) の合成語で、『岩刻文字 (文様)』の意で、Petro-Glyphともいう。

先史時代から岩石に刻まれた文字や文様のことをいう。

日本では従来「5・6世紀頃に日本に漢字が伝わる以前には文字が無かった」とされていたが、現実にはこの考えでは解釈・説明できない文様が多数存在する。

今までは、このようなものを『不思議なもの』『意味不明のもの』『神仏の成せるもの』、果ては『宇宙人説』など苦しい説明をしてきた。

しかし、ここ30年間の世界の主要な大学や研究機関によって、世界的にペトロ・グラフが分布していて、更に日本にも同じようなものがあり、比較・考証によってその意味を知ることができるようになってきた。

これによって「日本でも、漢字以前に文字や文様が存在していた」と考えられるようになってきた。

また、遙か遠く離れた国や地域と同じ (共通の) ペトロ・グラフが日本にもあるという事はどんな意味を持つだろうか？

欧米の学会では「紀元前2000年代、古代文明国 (シュメール・ケルト・フェニキアなど) の人達が黒潮に乗って北上し、環太平洋の国々へ渡り、その文明をひろげていった」という考えが定説となっており、「古代日本にもシュメール・ケルトの海洋民族が渡来していた」学説は有力である。

更に、最近では「ケルト以前にも高い文明・文化を持った民族が日本に到達していた可能性が高い」とする学説が提起されている。

日本の考古学界でも『吉野ヶ里遺跡』や『三内丸山遺跡』などの新発見によって今までの定説がどんどん覆され、年代が更新されているので、これらの学説もまったくのたまたまとはいえないであろう。

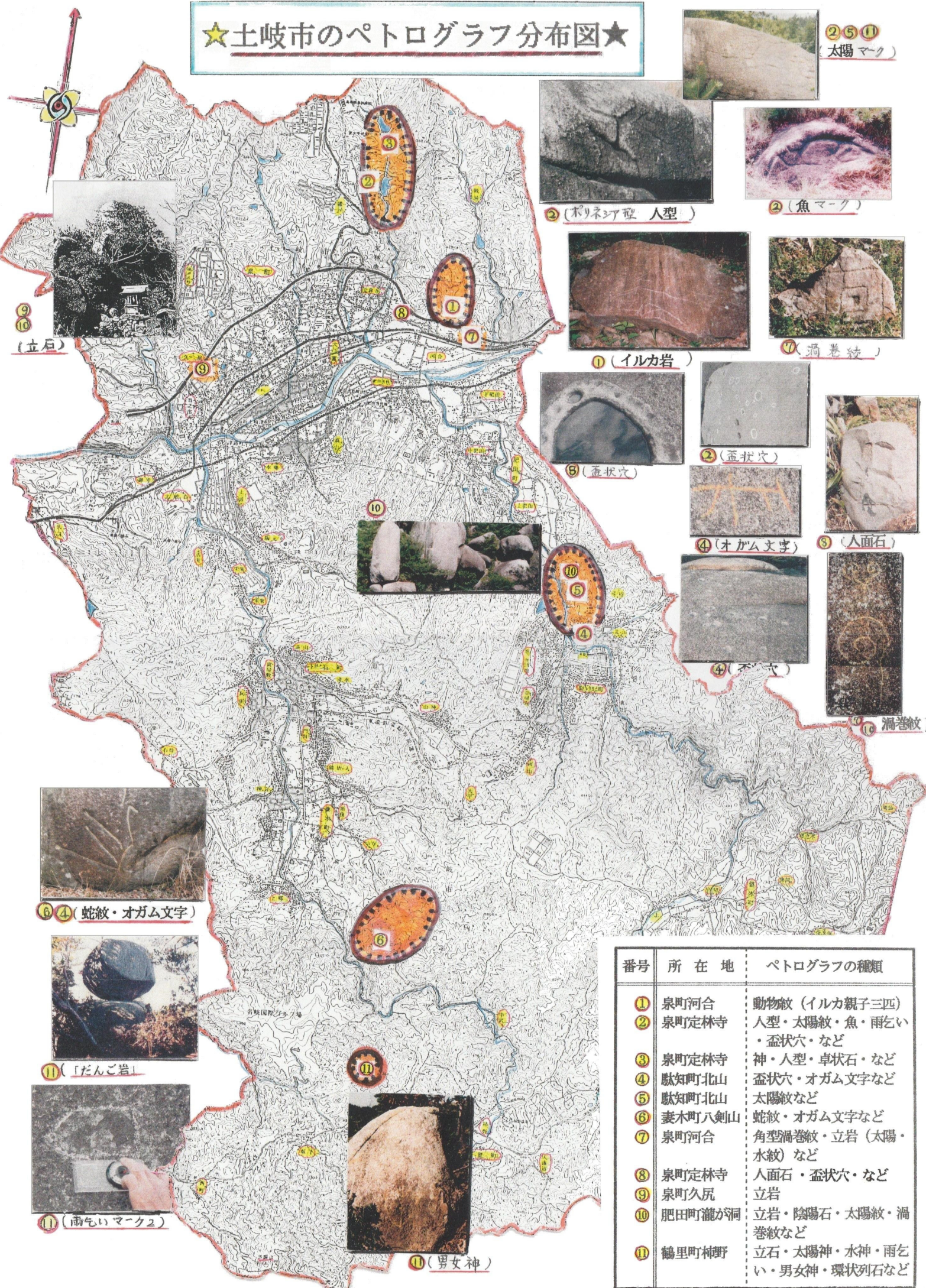
さて、批判・論評はいくらでも出来るが、いくら論じていても真偽の解決とはならない。

今やるべき事はこれらの学説を「是」として前向きに捉え、その根拠となる資料を収集し、偏りのない考証を重ねて学術的に定義付けていくことではないかと考える。

○ ペトロ・グラフの種類

- (1) 自然発生的に物の形を簡略化したもの (太陽紋・魚紋・蛇紋など世界共通)
- (2) ある民族 (種族) 独特の意味を持つもの (守護神・星座・生活習慣上重要なもの)
 - ・ 守護神～太陽神 (ベル・・・ケルト族の最高神)・女神 (キ)・大地母神 (ニンキ・ニンジャ)・牛神 (グド・アルダ) などを表示したもの。
 - ・ 星座～北極星 (海洋民族) を中心に明るい星 (1等星) を表示したもの。
北斗星 (鉄文化民族) を中心としたもの (北辰信仰)。
- (3) 盃状穴^{まじな}～呪い印・星座 (宇宙)・親子関係などを表示したもの。

★土岐市のペトログラフ分布図★



25⑪
(太陽マーク)



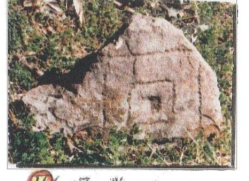
② (ポリネシア型 人型)



② (魚マーク)



① (イルカ岩)



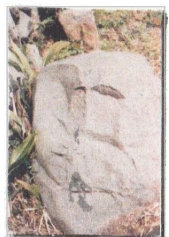
⑦ (渦巻紋)



⑤ (盃状穴)



② (盃状穴)



③ (人面石)



④ (オガム文字)



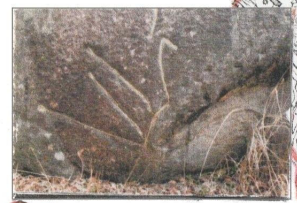
⑨
⑩
(立石)



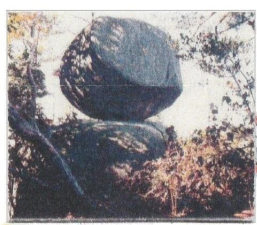
④ (盃状穴)



⑦ (渦巻紋)



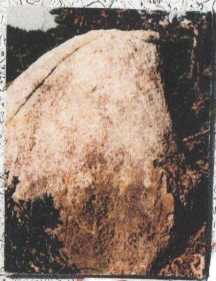
⑥ ④ (蛇紋・オガム文字)



⑪ (「だんご岩」)



⑪



⑪ (男女神)



⑪ (雨乞いマーク)

番号	所在地	ペトログラフの種類
①	泉町河合	動物紋 (イルカ親子三匹)
②	泉町定林寺	人型・太陽紋・魚・雨乞い・盃状穴 など
③	泉町定林寺	神・人型・卓状石 など
④	駄知町北山	盃状穴・オガム文字など
⑤	駄知町北山	太陽紋など
⑥	妻木町八剣山	蛇紋・オガム文字など
⑦	泉町河合	角型渦巻紋・立岩 (太陽・水紋) など
⑧	泉町定林寺	人面石・盃状穴 など
⑨	泉町久尻	立岩
⑩	肥田町瀧が河	立岩・陰陽石・太陽紋・渦巻紋など
⑪	鶴里町村野	立石・太陽神・水神・雨乞い・男女神・環状列石など

土岐市の先史遺跡について

土岐市には、石鏃・石匙・石斧などの石器が採集される所が数多くあり、また地域によっては古墳が多く残っており、可成り早い時期から人々が生活していたと思われる。

しかし、その生活についてはほとんど解明されておらず、空白のままの部分が多い。

そこで、石器・土器・住居跡や、生活のために記した記述や宗教上の遺構などその証となるものが残っていないか、その痕跡を探し出して地域の歴史をはっきりさせたいと考える。

まずその方策として

- 1、石器・土器の出土分布、種類を分析し、発掘調査し資料にまとめる。
- 2、古墳の分布を調査・発掘し、まとめる。
- 3、岩石に記されたメッセージを探す。
- 4、岩石の建造物を探す。
- 5、その他

次に調査したことを表にまとめる

項目地区	泉	土岐津	下石	妻木	鶴里	曾木	駄知	肥田
石器	一の澤 大坪 中嶋 丸石 五斗蒔 根之上	沓掛	貢 門田 川尻 石拾 山神	大平 砂取 西山	白鳥	大草 蘭仙	おから 西山 雨池	白山宮裏 杉焼池畔 八剣宮 上肥田川
土器	鍋割		阿庄 福戸根	砂取		大草	平	
古墳	乙塚 段尻卷 愛宕 炭焼 北山 東山 雨宮	熊野 沓掛						
住居跡								
文字・絵	河合馬屋 定林寺湖			八剣山	坂下山		稚児岩 おから 法務局	

◎岩刻線画・文字（ペトロ・グラフィ）

1、「イルカの絵」（泉町河合区馬屋平）96、




河合の大洞川畔の東、標高約185メートル地点に、イルカを描いたと思われる岩がある。


長さ約2メートル、幅約1メートルの岩に、約2センチの線で3頭のイルカが左向きに彫られている。その付近には、ほかに線刻のある岩の破片は散乱しているが、完全なものは見つかっていない。今後の探索に期待したい。


イルカの線刻岩は、飛騨高山の位山にある「あららぎ湖畔」で1頭だけの線刻のものが1個見つかっている。イルカの線刻は、世界的に分布するが、極東では韓国のウルサンの海岸部岸壁に彫られた1例だけで、日本国内では「あららぎ湖畔」と今回発見された「土岐市」のもの2例のみである。


さて、なぜここにこのようなイルカを描いた遺物があるのか今のところ不明である。吉田信啓さんの説明によれば、「イルカは人なつこい動物で、古代からイルカの観音参り・磯部参り・白山参り・宮参りなどといわれ、先祖の霊を祭る先導をするといわれ、先祖供養として彫られたのではないか」という。

また、今から4～5,000年以前は丁度縄文海進期にあたり、その海岸線は大垣・羽島・春日井・可児辺りまで入り込んでいて、この辺りからは数キロの距離にあったので、恐らく当時ここに住んでいた縄文人の中には、イルカを見た人も大勢あったろうし、近くの土中からイルカや鯨の化石が多く発見されている事からも、イルカについての知識もかなり詳しくあったのではないかと想像される。

この岩の裏側には、次のような線刻がみられ、左から  のように思われる。

 (ナ) は食料を、

 (ヤ) は武器を、

 (へ) は繁栄を意

味する古代和文字と解読される。しかし、いつの時代に記されたものかは不明である。



2、ポリネシア系人型・太陽マーク・神マーク・魚マーク・盃状穴など

(泉町定林寺区園戸)

泉町定林寺地区のほぼ中間を南北に流れている定林寺川は、北面のなだらかな丘陵を水源としている。流下距離が短いため急流で岩場が多く水量も少ないが、昔から農業用水として大切にされてきた。更に上流には、江戸時代にため池（榎山池・市之澤池）が作られ、「水神様」を祭って村に役だってきた。

この二つのため池の中間地点の南向きのなだらかな斜面から、石鏃や石片、小さな碧玉、赤玉などが出土し、太古から人が生活していたことが想像される。したがって、この近くの岩に古代人の残したもの（メッセージ）がなにか残っているのではないかと思われる。

また昭和37年4月、農業用水と治山を目的として上記の二つのため池の下流、岩場の下に「定林寺ダム」が造成された。この事業によって家屋1軒・耕地約7反歩が湖底に沈んだ。

◎先史時代の遺跡があると予想される候補地

イ、定林寺湖湖底および湖畔

◎定林寺川が流れ込む所にある巨石群(96, 8/10)

①北面の一際大きな岩



- ・南面に、四角形を中心に放射線状に直線の引かれた印（太陽神マーク）
- ・石の頂上平面部に三角形型（△）の浮き彫り（ド・・・神などを表す）

② ①の約10メートルほど南の岩



- ・東面に人間が両手足を広げた形（両手長さ約25センチ）とその右に、バーコード様の線刻がある。
（ポリネシア地方の岩石に刻まれている巨人族伝説の人型に酷似）、右方に恐竜か人型が彫られている。

- ・人型の下にπ（横線約40センチ、縦線約70センチが並行して2本）シュー（大気の神の意）

③ ②から約3km西の小岩

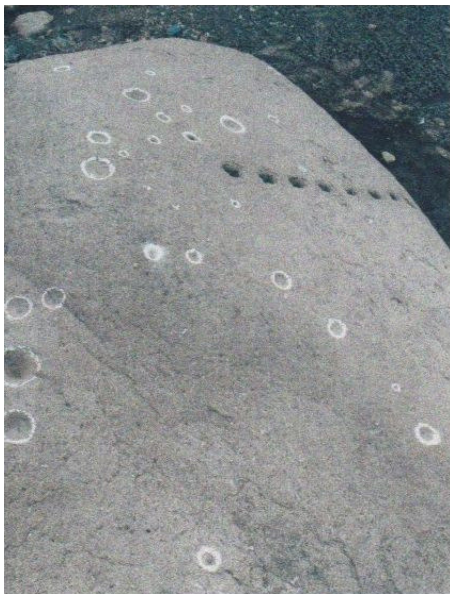


- ・右向きの魚（ナ・・・魚の意）を大きく彫り込んである。全長約168センチ・・・イルカか？
- ・石の上部にも線刻あり

④ 太陽マーク多数見つける

◎西の湖畔

⑦ 星座を表す盃状穴(96, 10/20)



通常は水没している岩（320×170センチ）の西表面に、直径7～4センチの盃状穴が25～28個も彫られているのを発見。

直線状に彫られているもの、三角状のもの、弧を描くものなどで初めはなにを表現しているのかわからなかった。

天空の星を表しているのではと思い、いろいろな星座を当てはめてみたがぴたりしなかった。

ふと直角三角形をなす盃状穴をベガの直角三角形と考えてみたところ、1等星のほとんどがおもしろいように適合していった。その結果、北極星を中心に明るい15の星の位置関係が示されていることがわかった。

小さな盃状穴やはっきりしないものは、これから徐々に検討していきたい。

古代の人達が、いつ頃、なんの目的でこの盃状穴を彫ったのかわからないが、すでに北極星が常時北を示すことを知り、時期によって変化していく星の位置関係を一枚の岩に彫り込んだというその叡知の高さには驚かされる。また、宇宙に対してこのような高度な関心と知識を有していたことは、ひょっとして彼等は海洋民族（阿曇族）だったのではないかという推理が頭をよぎる。

3、巨石信仰1、「大明神」について (泉町久尻日の出)

泉町久尻の小高い丘陵の南面に、2つの巨石があり、「大明神」という名で信仰されていた。これは、太古の人達がこの巨石を『神の依り代』として崇拝していたと考えられる。

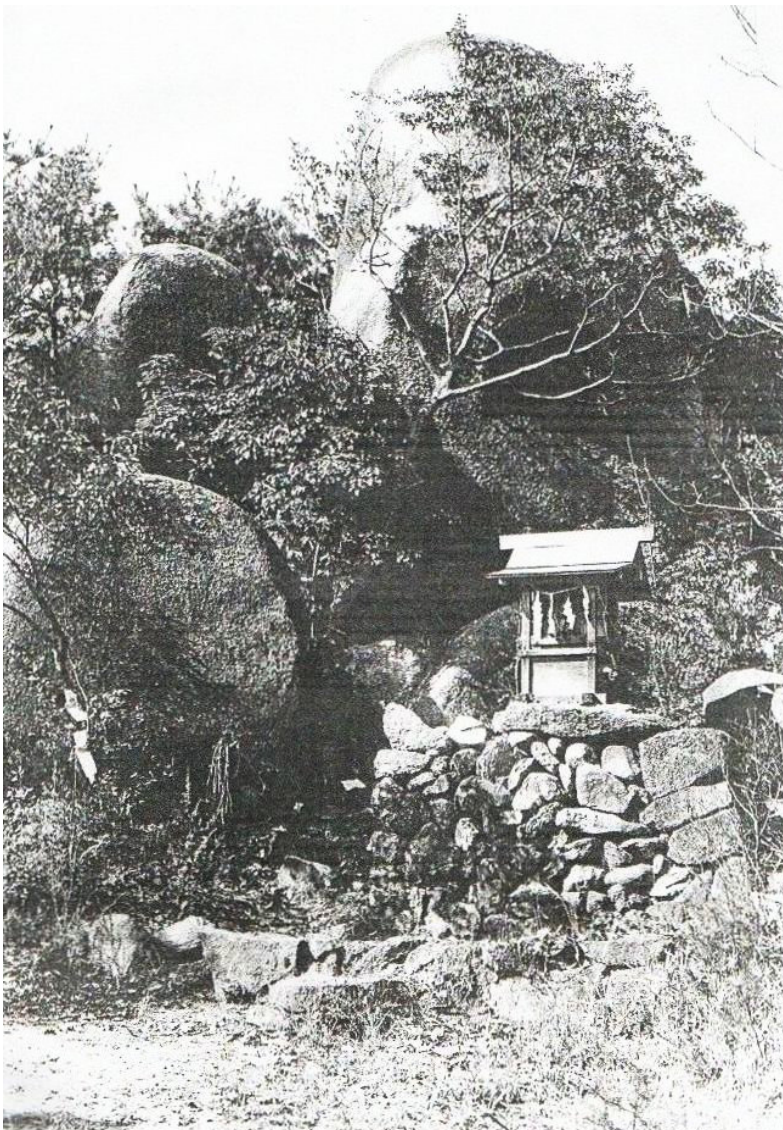
しかし、昭和43年10月28日、久尻地区の神社を一カ所に纏めて久尻神社とした際、『諏訪神社』として合祀された。祭神は建御名方神・大国主神である。

向かって右が大きな立石、左は丸みを帯びた石で互いに支えあうように接していて、二つの石の間には隙間があり、破壊されるまで狐が住んでいたそうだ。(柴田 全祥氏談)

久尻神社に合祀後、大明神の巨石は砕かれ、宅地造成化されてしまった。

現在は向かって右の「立石」の根本部だけが残っており、砕かれた岩はすぐ下の宅地の囲い石として積み上げられているようだ。(この宅地は、家屋が建っていない)

今となっては、この巨石に刻まれていたと考えられる線刻を確認できないのが非常に残念なことである。



近所住民の覚え

立石の右（東）側面に鳥居マークがあった。

(鈴木 誠一氏談) 8/24

言い伝えによると、ある時この岩の上に一頭の白馬が現れた。

村人が捕まえようとしたら、大きく嘶き声をあげて諏訪の方向へ天空を駆け去っていったという。

後には、岩の上に白馬の「ひずめ」の跡がしっかりと残っていた。

この「諏訪神社」は長野県の諏訪神社と同じ祭神である。

巨石信仰2、「とりのこ岩」について (肥田町上肥田瀧道)



この付近にある岩石にもいろいろな文様らしい線刻や浮き彫りがあるように見受けられる。

さらに切り石や小石を巾3尺、縦1.5尺、高さ7.5寸に積み上げ、神の降臨を願い、祈ったと思われる祭壇(礎城神籬)が2基見つかった。

この地域は、ある時期に修験道の道場・聖地となっていたという事を聞いたことがある。あるいはその時代のものかも知れないが、神と人間との接触を試みた地点には間違いないであろう。

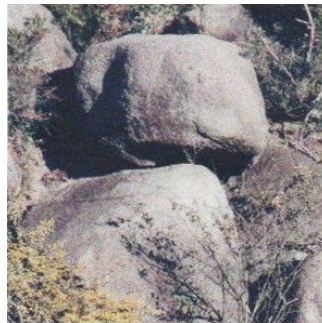
現在では弘法信仰の聖地として、弘法さまを奉る石窟や多くの石像が点在し、赤い帽子や涎掛けを奉納したり、花を手向けたりしてお詣りする老人の姿がみられる。これはこの地がもともと「大地母神信仰」や「生命誕生」の霊場であった所が後世仏教の伝来によって「子安観音信仰説話」や「弘法信仰説話」にすり替えられたものと考えられる。

肥田町と駄知町の境界近くの山中にあるこの岩は、2, 3段の石組みの上にスックと立っている。道路上にあるので見過ごしがちであるが、気をつけておれば見る事ができる。

すぐ近くに住んでいる古老の話では、その形が「山の神」の祭りに作るおにぎりの形に似ていることから、昔から「とりの子岩」と呼ばれてきたそうだ。

表面には線刻があるように見えるが、絶壁に立っているため近寄ることができずその確認はむずかしい。

また、近くにこの岩に対比するように岩の中央部に凹みのある岩が存在する。この二つの岩は男女の性器を表し、「生命の誕生」を意味しているとも考えられる。



4、「オガム文字」と「蛇紋」(妻木町八剣山・駄知町北山旧法務局跡・おから)

イ、八剣山(妻木町旭町3020)のオガム文字(97,4/10)



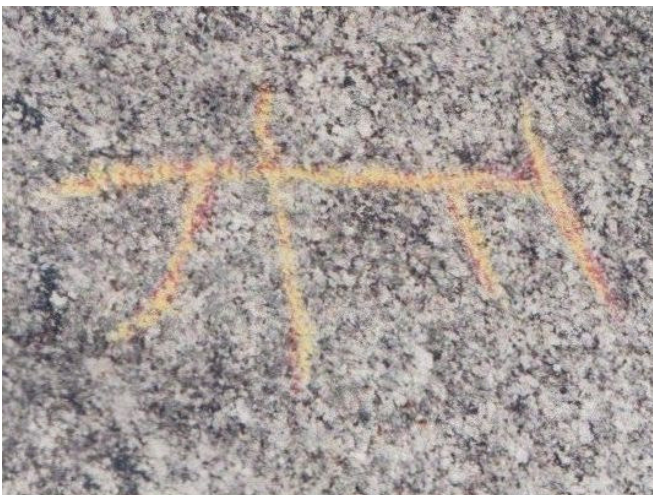
妻木町の八剣山山頂(478.2 ㍎)はテレビ放送中継のアンテナが設置されているが、そこに岩盤と思われる巨石の重なった所がある。その中心になる岩の側面に線刻がある。この岩は、もとは立岩状であったものがその後何らかの理由で2～3個に割られた形跡があり従って線刻の全要を知る事は今のところ難しい。(しかし、割られた部分がすぐ隣に落ちている可能性が大きいので、今後早急にそれを元に戻して線刻の全体の解明にあたりたい。)

この岩に刻まれている線刻は、下部に蛇様のものが6本、上部の割れ目に沿って1本の横線上に縦線が交差した「オガム文字」様と吉田信啓日本ペトログラフ会長によって確認された。(4/17) なお、文意については、欧米の「オガム文字」の権威者に解説を依頼している。

この「オガム文字」とは、今から二千五百年～三千年前のケルト人の文字とされているもの。更に右下部分に剥ぎ取られた痕跡が見られるが、何があったのか現在のところ不明であり今後の調査に期待したい。

また、八剣山西側丘陵地(砂取地区)では縄文早・中期の土器・土偶・石器などが多く採集されている(土岐高社会研究会OBによる)ことから、この地域にはかなり古くから人類が住み着いていたことがわかる。

ロ、駄知町北山旧法務局内大岩のオガム文字



駄知町北山旧法務局庭にある大岩の南西部分に、長さ30㍎、幅20㍎の大きさの「オガム文字」が、多くの盃状穴と共に彫られている。

その紋様は左のとおりであるが、カナダ・ケベック州の国際ケルト学会のマイケル・ジェラルド・ブッテット博士の鑑定の結果、

“With this boulder, Marks of the Pure, and wild, Caution of the youthful Sun” であると解説した。その意味は『この磐に

よる、若い太陽の純粹で自然な警告を刻む』となる。

八、駄知町北山「おから」の「蛇紋」

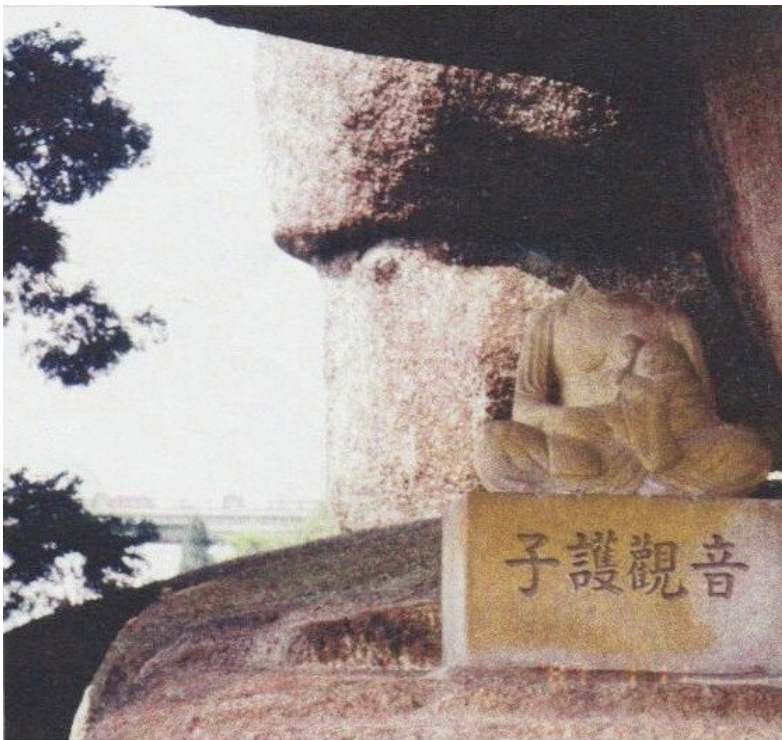


駄知町北山の通称「おから」の子安観音入口の立岩に、蛇の紋がある。直径15㌢の円形に、長さ60㌢の尾を付けた蛇形の線刻である。嘗ては左山側にも立岩があり、そこにも彫られていたと思われるが、現在は無くなっている。

「蛇紋」は生命の発生・誕生を意味する地母神・土地や人間の守護神として原始の時代から世界各地に共通する神の1つである。

その「蛇紋」がここにあるのは、

この地がもともと「大地母神信仰」や「生命誕生」の霊場であった所が、後世仏教の伝来によって、「子安観音信仰説話」にすり替えられたものと考えられ、この地に伝わる子護り・稚児岩伝説もこの思想から生まれたのかも知れない。



5、太陽神マークと盃状穴 (駄知町北山)

イ、太陽神マーク (あるいは聖所マーク) (96, 6/) 稚児岩大橋東パーキング内



駄知町北部を通るバイパスの稚児岩大橋東のパーキングにある大岩に「太陽神」あるいは「聖所」のマークが彫られている。更に西(右手)に線刻は続いている。なにが彫られているのか。なにを表しているのか現在のところ解読できていない。

このほかにも、二重の円と思われる線刻やアルファベット様の線

刻が見られるが、正確には判読できないのが残念である。

ロ、盃状穴 (天空の星) (97, 4/24) 駄知町北山



旧法務局内にある大岩の上部表面を中心に直径11センチ～5センチの盃状穴が30数個彫られているのが見つかった。

その配置は、泉町定林寺湖中で見つかったものと酷似していて、日本で見られる殆どの明るい星(1等星が主)が彫られている。

大きな違いは、盃状穴の直径が大きいことと、東端に幅30センチほどの大きな割れ目が入っていることである。その方角は真北

より西に約12～15度振っている。

また、岩の側面には、いくつかの盃状穴と線刻がみられるが、岩質が荒く風化が進んでいるためにその判読は難しい。

かつて古代人は、ここに祭壇を築き、天空の偉大な星や自然物の姿を刻み、神秘的な宇宙に向かって自分達の幸せを願い、祈り、神々と交信したのではないかとと思われる。

この地は古くから北山の通称「おから」や駄知中学校付近の山上・対岸の西山地区・「論地」から数多くの石鏃などの遺物が採集され、古代人の存在が推測されていたが、今回の発見によって古代人の生活範囲が更に広められたといえよう。この付近の地形は、南向きのなだらかな斜面が続き、最低部には肥田川が緩やかに流れ、それにいくつかの小川が合流していて、狩猟生活を営むには好適な場所だといえる。

また、この地に建っている建物はその歴史が古く、かつては尋常小学校 (M16, 12～37, 12)・町役場 (M37, 1～S13, 12)・御嵩区裁判所出張所法務局 (S13, 1～S58, 3)・婦人センターとして絶えず中心的な重要な役割を果たして来た。これは、この地が古代からなんらかの聖地・特別な場所として引き継がれて来たのではないかとと思われる。

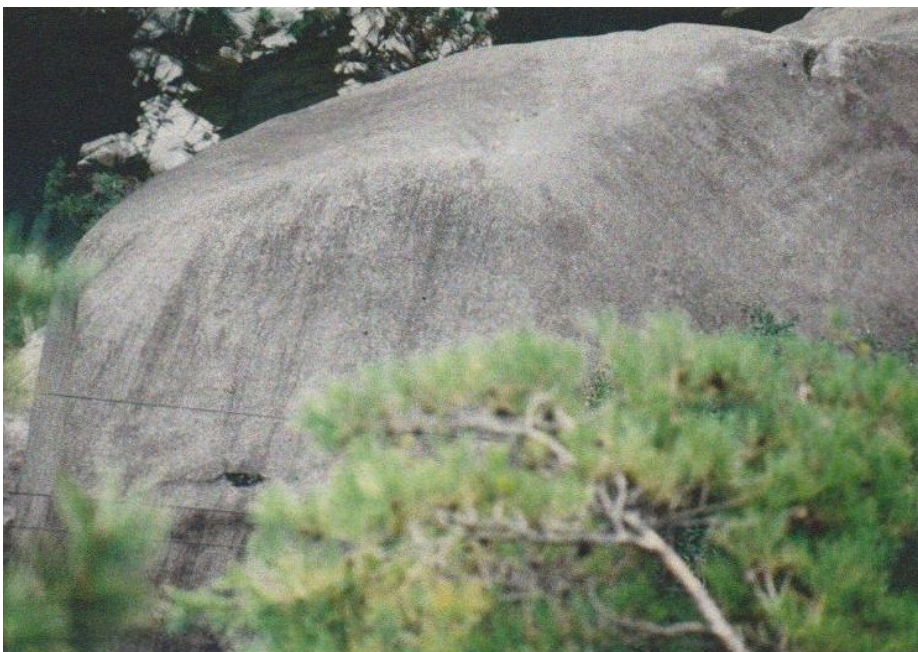
更に、北極星を中心にベガの直角三角形をきっちり彫っていることなどから、この盃状穴を彫った古代人は、かなり高い知識と文化を持った海洋民族(安曇族)の可能性が強い。



ハ、稚児岩の線刻

肥田町から肥田川に沿って駄知町に入る所にある大きな岩が、「稚児岩」である。この岩はいろいろな伝説のある有名な岩であるが、その上部にいろいろな線刻があるように見える。その線刻は『魚様』や、『四角いマスの中に人型』、『三角』などである。

しかし、川縁にそそり立っている岩なので、実際に調べることができないのが残念であるが、早い時期に何らかの方法で検証したいと考えている。



6、渦巻紋・蕨手紋（生命誕生の印）〈エマーゼンシイ・スパイラル〉

イ、肥田町杉焼の山中



肥田町上肥田滝道の「とりのこ岩」に対する岸の大岩に、渦巻状の線刻が三～四個彫られている。

岩の中心に大きく一個（長さは68センチ、巾は33センチ）その上方に渦巻紋か蕨手紋（長さが センチ、巾は センチ）、更にその左上方にも渦巻紋（長さ センチ、巾は センチ）が彫られている。

渦巻紋は先史時代の世界各地の遺跡からも出土し、古くから「生命力」を示すものとされている。

欧米では、「生命誕生の渦巻紋」とよばれ、ギリシャ・ガンダーラ経由で中国に入ったものは、雷紋や唐草文様となって日本に伝えられている。

一方日本では「呪い文様」として6～7世紀の装飾古墳や石棺・古鏡の装飾にも使用されている。

この場所にこの「渦巻形・蕨手文線刻」が彫られているのは、ここが何らかの目的で対岸の何かを遥拝した場所のように考えられる。

ロ、泉町河合228

永井 了（さとる）さん宅の裏庭の石垣にはめ込まれていた縦 センチ、横 センチ厚さ センチの石には、四角い渦巻紋が彫られている。

尚、周りはきれいに成形され、裏側は平らでなにかを摺ったような跡が見られる。

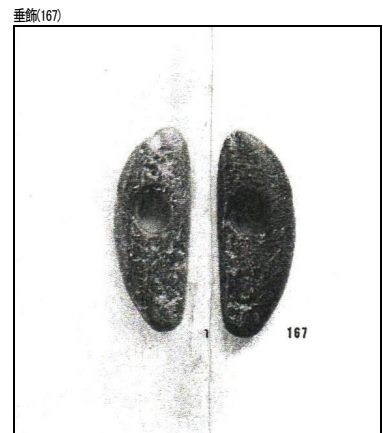
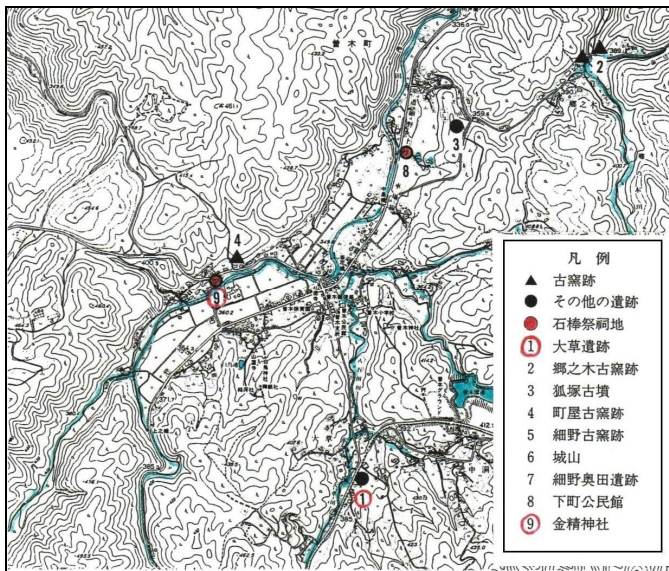
鋭い物で四角形に切り取られており、明らかに人工的に加工されているが、その目的・用途はわからない。



7、縄文遺跡 (曾木・鶴里)

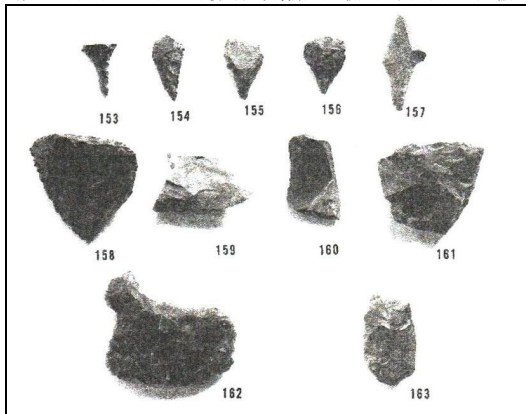
イ、^{おおくさ}大草の縄文遺跡 (曾木町 853, 854-1 大草地区)

平成8年8月12日から10月23日まで発掘・調査を行い、縄文式土器8,402点、石器26,005点を採集した。現在までこの地域での土器の出土は非常に少なく、今回のかなりまとまった出土は土岐市の先史時代を考える上で極めて貴重な成果であるといえる。時代は、縄文中期末のもので(加曾利EIV式併行期)文様は縄文のほか渦巻き・木の葉痕・網代痕・八羽根状沈線・刺突紋・蛇行垂線・櫛描き線・縦横線列・無文などがある。また石器では石鏃265点、石錐12点、磨製石斧4点などで、石材はチャート55.8^点、黒曜石34.0^点、下呂石10.2^点である。特徴としては、石材に黒曜石が多いこと、粘板岩製の垂飾といわれる装飾品や結晶片岩製の磨製石斧が出土していることから、交易範囲が以前よりもぐんと広まり、かなり豊かな縄文生活をしていたことが推測される。

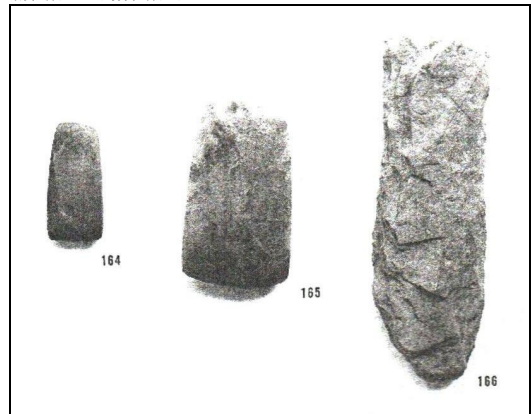


図版 19 遺物写真 (6)

石錐(153~157)・スクレイパー(158-159)・使用痕のある剥片(160)・石核(161)・石匙(162)・クサビ形石器(163)



磨製石斧(164-165)・打製石斧(166)



ロ、石棒と石皿（曾木町町屋と中切）

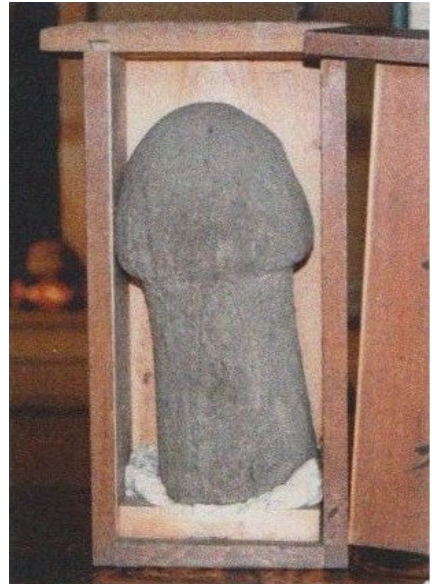
また、近くには「石棒」（男根を形どったもの）や「石皿」など、古代人の遺したものが数多く出土している。

1、「石棒」は『金精様』^{こんせいさま}とよばれ、江戸時代の末期、近所に住む農民が田の中から棒状の石を掘り出した。

その形が男子性器を型どったものであったので、人々はおおいに驚いて相談の末、この種類の大御所犬山の「県神社」から神霊を勧請してこれを奉ったという。この『金精様』は女性の「下の病気」に良く効くという評判で結構賑わったそうである。

この石棒は、竪穴式住居の中心にその一家あるいは一族の守護神・子孫繁栄・豊穰の神・信仰の対象として奉られていたと考えられる。

今はその地主の家で大切に奉られて、1月15日には親族一同で盛大にお祝いをしている。



2、同じように「石皿」も近くの田の中から出土し、今は組の公民館に保存されている。

以上の事から、この付近には早い時期から人が住み着き、集団生活を営み狩猟生活を送っていたことが推測されるが、十分な調査はおこなわれていない。

8、弘法の足跡・団子岩など（鶴里町）

鶴里町の各地の山林には大岩の点在する所が多いが、その大岩の表面に凹みがあり、古くから「弘法の足跡」といわれ、信仰の対象とされてきた。その窪みに溜まった水を付けると、痛みが取れたり、イボや腫れ物が治ったという言い伝えがある。

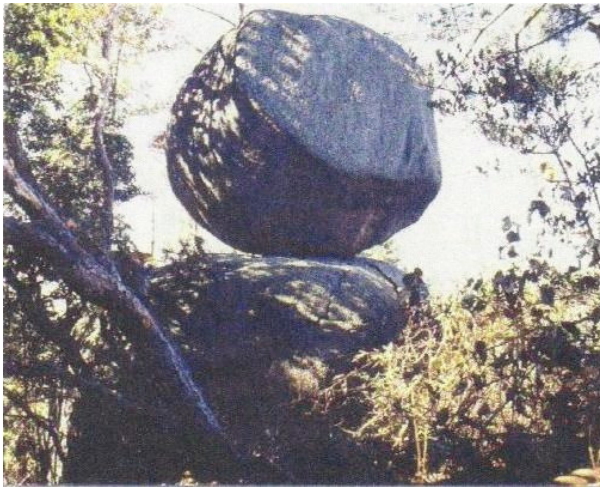
これは、ある時偶然そこに溜まった水の効力を知った人が、弘法信仰の考えに巧く取り込んだものと考えられる。

この窪みは自然発生的に出来たものもあるが、中には古い時期に古代の人がある目的のために岩を彫ったものもある。

これは、その配置や形や大きさによっていろいろに分類することができる。

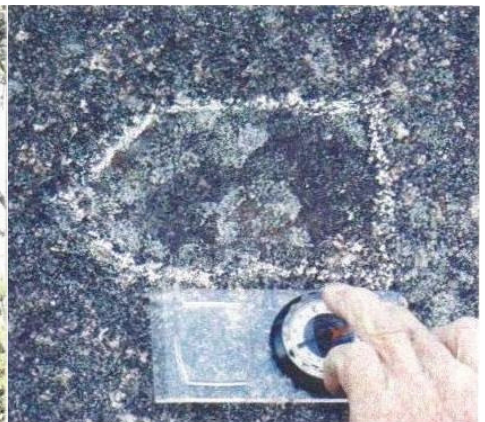
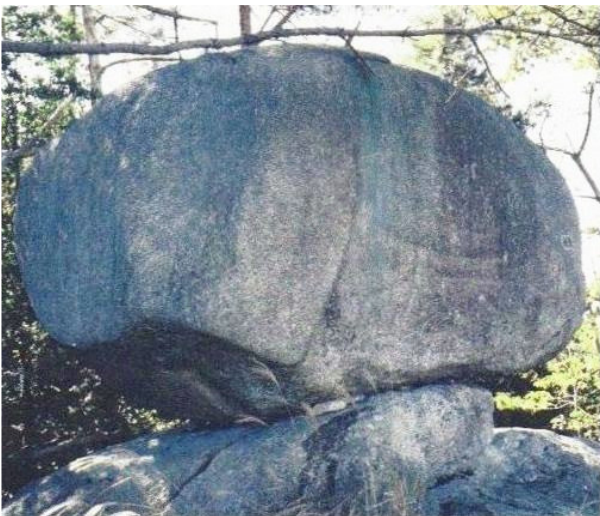
古代人が何を考え、何を願いながら岩に刻んだのか？それを追求することは大きな夢とロマンがある。

イ、団子岩（鶴里町柿野坂下の山中）

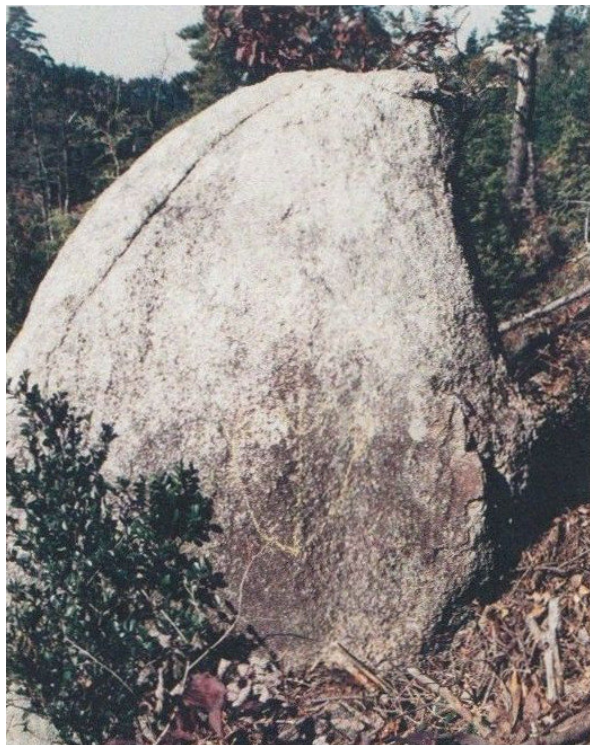


鶴里町柿野坂下地内の山林の頂上近くに昔から「団子岩」と言われている大岩がある。この岩は、長さ389㎝、高さ240㎝の大ききで、山上から見ると円に見える1点で支えられているように見える不思議な岩である。

また側面の長い面には3本の線刻と五角形の雨乞いのマークがある。3本の線刻は水神を表し、雨ごいマークと共に古代人の記した信仰の対象であった。



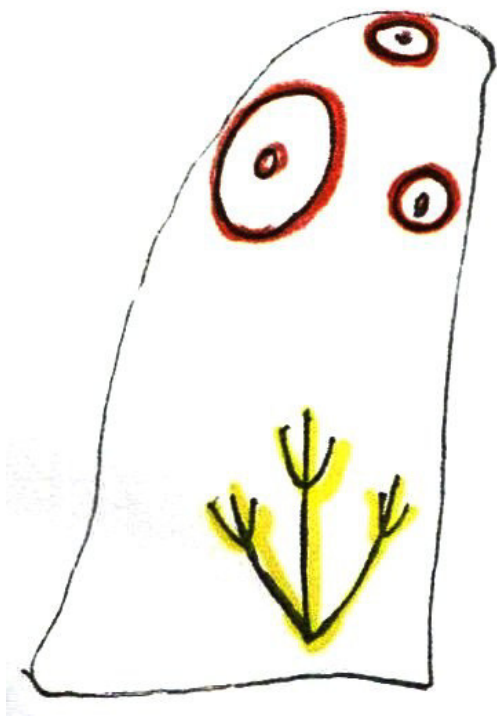
ロ、「三個の同心円と三つ又矢印」の線刻



同じく鶴里町柿野坂下地内の山の中腹に神々しい立岩がある。

山の下からも見る事ができるが、この岩に三個の同心円と三つ又になった矢印の線刻が見つかった。

カナダ・ケベック州の国際ケルト学会のマイケル・ジェラルド・ブツテット博士に鑑定・解説を依頼したところ、三個の同心円文様は『マヤ文明や古代中国などでプレアデス星団を表したもの』であり、三つ又の矢印文様は『北方ユーラシアで地底界・地上界・天上界の三界を表すもの』であると解釈された。



◎土岐市のペトログラフ分布

○線刻の部

分類	記号	図柄	意味	所在場所	
1、線画	N(魚) 《な》		①イルカ	・泉町河合馬屋平の岩	
			②鱒	・泉町定林寺定林寺湖畔の岩	
			③鮭	・泉町定林寺定林寺湖畔の岩	
	E(エンリル)		水神	・鶴里町柿野坂下 山中	
	H(人型)		ポリネシア 型人型	・泉町定林寺定林寺湖畔の岩	
	I(雨乞) 《イル・ガ・ガ》	①		我に雨をと 願う	・泉町定林寺定林寺湖畔の大岩
					②
	G(神)			①太陽神	・泉町定林寺定林寺湖畔の大岩
					・駄知町北山稚児岩大橋パーキングの大岩
					・鶴里町柿野坂下山中
《ベル》			②太陽神	・泉町定林寺定林寺湖畔の岩	
《ト》			③神	・泉町定林寺定林寺湖畔の大岩	
《グド、 グブ》			④豊穰神	・泉町定林寺定林寺川上流 (少年自然の家活動場内)	
《キ》			⑤男 神	・鶴里町柿野坂下山中	
			⑥女 神	・鶴里町柿野坂下山中	

分類	記号	図柄	意味	所在場所
2、文様	○ (オガム文字) J (蛇) 《 ジャスラ 》 S(渦巻) 《スパイラル》		? 文中参照 土地母神・ 生物の誕生 守護神 誕生の意	・妻木町旭 3020 八剣山山頂の大岩 ・駄知町北山旧法務局中庭の大岩 ・妻木町 3020 八剣山山頂の大岩 ・駄知町北山「おから」 ・泉町河合 永井 了氏宅 ・肥田町杉焼の山中

○ 彫 穴 の 部

分類	記号	図柄	意味	所在場所
3、盃状穴	U(宇宙) 《 》		満天の明星 北極星・ベ ガの三角形 北斗星・	・泉町定林寺定林寺湖畔の大岩 ・同上地の旧河沿いの岩 ・定林寺観音堂前の手水鉢 ・駄知町北山旧法務局の大岩

○ 石 造 物 の 部

分類	記号	図柄	意味	所在場所
4、立石	T 《 テーブル・ ストーン 》 M 《 マンヒル 》		祭祠跡 日神・水神 神の降り所 神の降り所	・泉町定林寺定林寺川上流の大岩 ・泉町河合 永井 了氏宅裏 ・泉町久尻「大明神」の立岩 ・肥田町上肥田滝が洞の立岩 ・妻木町旭町の「親子岩」
5、彫刻	F		人面	・泉町定林寺 水野 輝夫氏宅裏

◎土岐市の岩刻文様の意義

☆土岐市で発見されたペトログラフィの意味

最近、土岐市でも各地でペトログラフィが発見されているが、それは

①いつ頃 ②誰が ③何のために このようなものを作ったのだろうか。
そしてその中心となる所は何処なのか？

今まで空白のまま手がつけられないままに残されてきた先史時代にスポットを当て、その不明な点を追求し空白の知られざる部分を埋めながら、歴史の流れをはっきりさせていくことは意義のあることと考える。

1) 「魚類」の線刻（泉町河合馬屋平・定林寺湖）

海のないこの地に、海に住んでいる魚類（イルカ・マス・サケなど）と思われる線刻が幾つか見られるが何故なのかについては、今のところ解明されていない。

これは全くの私見であるが、(イ) この線刻は嘗てこの地域が海であった（東海湖）縄文海進期に彫られたもの。(ロ) 湖の後退期を経て陸地化した以後も、先祖からの伝承としてその習慣がずっと引き継がれてきた。(ハ) この地に移り住んだ人達が海洋民族であったため、海に関係する習慣や知識が継続されているなどが考えられる。

2) 1等星の関係を示す「盃状穴」（泉町定林寺湖・駄知町北山旧法務局庭）

この地域には、表面に盃状の穴が無数に彫られている大岩が幾つかある。

この穴は「盃状穴」といわれ、古代の人達がある目的のために彫ったものと考えられる。私は、その配置が全天の明るい星（1等星）に一致することから、これは1年間の主なる星を記した星座表ではないかと推定した。

では何故星座を大岩に刻む必要があったのか。

それは、この盃状穴を彫った人達が、生活をする上で天空の星の運行を絶対に必要としたからではないだろうか。特に「北極星」を中心に描いていることから推理すると、これを彫ったのは、「海洋民族（安曇族）」か「鉄の文化を持った民族」ではなかったかと考える。

※ラルフ・ボルスト氏の「ストーン・サークルと天体との関係」の研究のストーン・サークルの配置図と土岐の盃状穴の配置が酷似していることがとても気にかかっている。

3) 「オガム文字」（妻木旭町八剣山・駄知町北山旧法務局庭）と「蛇の文様」

妻木町の南の丘陵中一番高い峯、標高 478.7 m の頂上部に磐座様の岩がある。その東面に蛇のような線刻と「オガム文字」といわれる線刻が彫られている。その示す意味は不明で、目下解説を依頼中であるが、この岩は2～3個に分割された形跡があり、全体の線刻がどのようなものであったのかを何とか究明したいと考えている。

（古い文書には「猿佛あり」と記してあるが同じ物か？）

またこの峯の北面中腹（砂取）から石器が採集されているが、土岐市ではほとんど出土しなかった縄文草創期の土器・土偶などが発見されていることから、古代人の

生活・祭祀の場としての可能性が強い。

その後、駄知町北山の旧法務局庭の大岩にもこの「オガム文字」が彫られている事がわかった。その意味は

With this boulder, Marks of the Pure, < Those from Aksu >
and wild, Caution of the youthful Sun
「この磐による、若い太陽の純粹で自然な警告を刻む」

である。

これは、カナダ・ケベック州の国際ケルト学会のマイケル・ジェラルド・プット博士の鑑定・解説に依るものであるが、解釈が難しくその真意は分からない。

4) 「三個の同心円文様と三つ又印文様」(鶴里町柿野)

3)で解説したマイケル・ジェラルド・プット博士は、鶴里町柿野坂下山中で見つけた「ペトログラフィ」の三個の同心円文様は『マヤ文明や古代中国などでプレアデス星団を表したもの』であり、三つ又の矢印文様は『北方ユーラシアで地底界・地上界・天上界の三界を表すもの』であると解釈した。

5) 「弘法の足跡」(鶴里町柿野・細野)

巨岩の凹みを「弘法様の足跡」だとし、そこに溜まった水を体の悪いところに付けると靈験あらたかに速やかに回復するという言い伝えが各地にある。

これは、そのほとんどが弘法大師誕生以前から存在していたもので、岩石が形成される際に自然に出来たものの外に、この地に住んでいた古代の人達が彫った可能性が大きいものもある。しかし、その目的・用途についてはまだわかっていない。

6) 「おから」(駄知町北山～肥田町上肥田滝が洞)

幾つもの巨岩・奇石が重なり、あるいは立ち並び、とても自然の造形とは思われない異様な雰囲気を感じる地域である。頂上部からは石器類が多く採集されており、また最近ではペトログラフィの発見もあり、早い時期から古代人の生活場所となっていたと思われる。また、いつの頃からか宗教的な霊場・修験の場として信仰の対象とされてきた。(山岳信仰・観音信仰・弘法信仰・御嶽信仰など)

ここには、大岩を割って庇状にした所に観音信仰として「子護観音」が祭られているが、その真下にある「稚児岩」の伝説と関連が強いと思われる。また、その手前の岩窟には今は消失してしまったが「鳥大明神」が祭られていたという。(これが「おから」の発祥元だと思われるが・・・)

7) 巨石崇拝(泉町久尻・肥田町瀧が洞)

泉町久尻の西部丘陵地の中腹に立派な立石があり、かなり古くから『大明神』の名で民衆の厚い信仰を得ていたが、時代とともに忘れ去られ町内の神社合祀の後に破壊され完全に消滅してしまった。

また、肥田町と駄知町境の通称「瀧ヶ洞」の巨石群の中に、『とりのこ岩』と名付けられた立石がある。これは、おにぎり形の巨石で、三段重ねの岩の上をしっかり立っている。その付近に祭祀跡とみられる石積みがか所ほど残っている。

8) 「とき」の地名とその持つ意味

現在は「土岐」と表記するが、「土寸」とも書いた。歴史書に現れるのは天武紀五年(676)「礪杵」とある。「礪」は粗砥、「杵」は杵形の武器の意で、合わせて『粗砥で作った杵形の武器』となる。土岐・瑞浪・恵那地域から、この形をした石器が数多く発見されているので、ひょっとすると、ここから来ている名称かもしれない。

また最近奈良で「刀岐」と書かれた木簡が発見された。

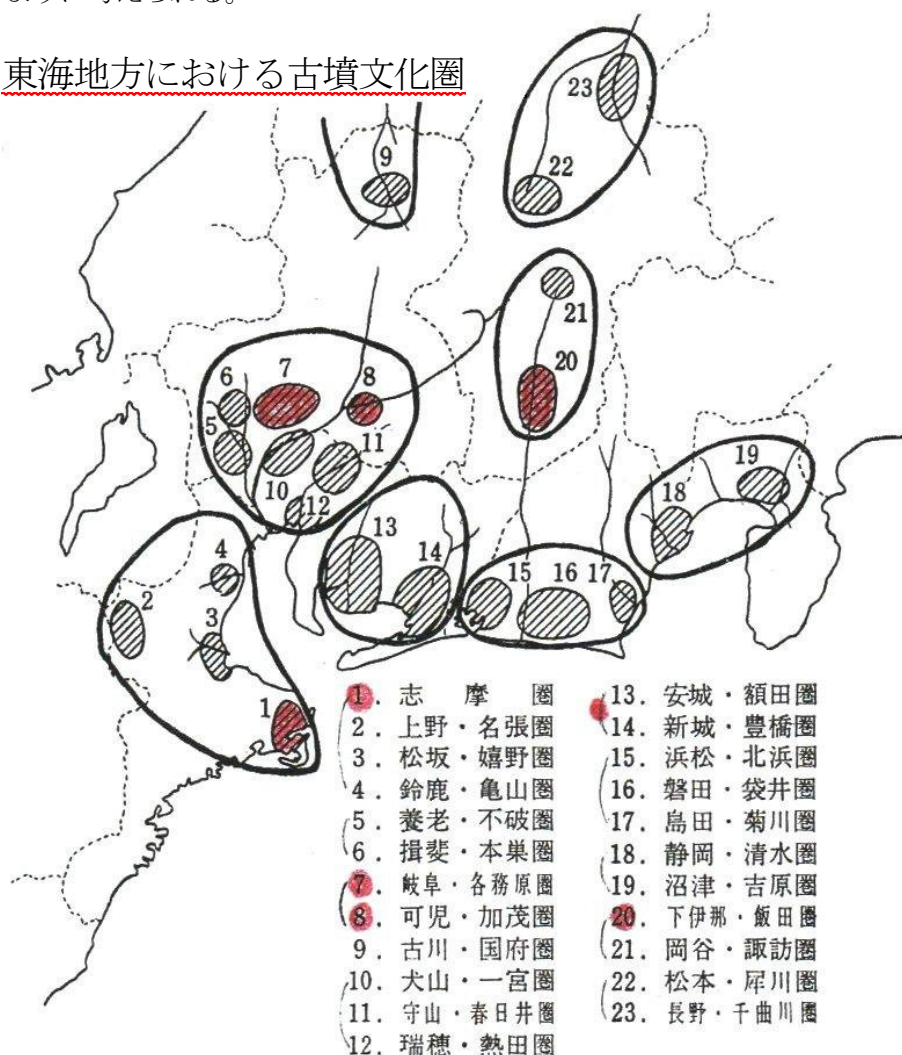
更にずっとさかのぼると、韓国鬮鷄野に住む一族が大阪湾に上陸し「菟餓野」「鬮鷄野」に住し、そこから東部へ移動していったという説もある。

『魏志倭人伝』によると、更にもっと以前から邪馬台国の北には多くの国があり、その中に「都支国」という国があったと記されている。

①次に斯馬國あり、次に巳百支國あり、次に伊邪國あり、次に都支國あり、
⑦次に弥奴國あり・・・

これらの表記が、現在のこの地を示すものかどうかということになると諸説あり、その真偽の程はわからないが、この地域はかなり古くから人間が住んでいた形跡があるように考えられる。

東海地方における古墳文化圏

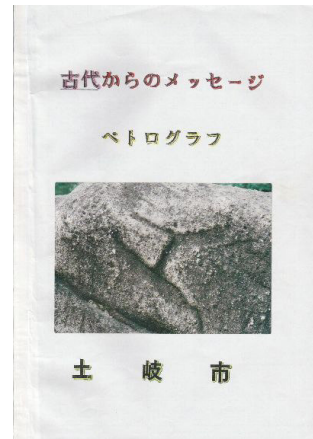


「古代からのメッセージ ペトログラフ」

(前編)

平成26年(2014年) 初版発行

著者・発行者 楯 滋夫
岐阜県土岐市泉町大富 253-3
(TEL : 0572-54-8279)



— 著者に無断で内容の一部または全部を複写・転載することを禁止します —



楯 滋夫 先生

昭和32年 岐阜大学 学芸学部 社会1部 卒業
昭和35年～昭和45年 土岐市立泉中学校教諭
(1960年～1970年)

(昭和38年度泉中卒業アルバムより)

楯先生の許可を頂いて電子ファイル化し公開しています。
出来る限り原本に忠実に電子ファイル化するよう心掛けて作業しましたが写真の配置、1行の文字数など原本とは異なる部分があります。
ファイルのサイズが大きくなるため2部構成となっています。
後編は「巨岩・巨石の神秘」です。

— 2015-6 岡田能治 昭和38年度泉中卒業 —